

近代日本の男子学生と「男色」

——1900年代の変容を中心に——

前川 直哉(京都大学大学院)

1. はじめに

本研究では、近代日本の男子学生の間に見られる「男色」と呼ばれる同性間の関係について検証する。近年、わが国においてもセクシュアリティに関する歴史社会学的な研究は漸く進められつつあるが、近代日本における「男色」や「同性愛」に関する実証的な研究は依然として少ないのが現状である。例えば本研究の対象である「近代日本の男色・同性愛」をテーマとし、歴史社会学的な視点と方法を用いた先行研究としては、わが国では古川誠の諸研究が挙げられる。だが古川の研究には、学生同士の男色と成人男性による男色とが混同して論じられているなど、疑問点・問題点も少なくない。古川らの先行研究を踏まえた上で、近代日本の「男色」「同性愛」に関して新たな知見をもたらす研究が求められていると言える。

近代日本の男色に関しては『当世書生気質』や『キタ・セクスアリス』等の文学作品から、「近代日本では男色は珍しくなかった」「硬派は男色、軟派は女色と色分けされていた」といった単純な構図が描かれがちである。だが、実際には近世後期から既に男色を否定的に捉える価値観は強まっており、開国後の明治期知識人の間では、成人男性の男色を排除する規範が共有されていた。明治期の男子学生による男色とは、そうした価値観・規範の中、「半人前」である学生のみならず許されていた性のあり方だったと言えるであろう。

本研究ではこうした男子学生間の「男色」を特に「学生男色」と名付け、そのイメージや実態について、1900年代における展開と変質を中心に検証する。

2. 前史:「学生風紀問題」以前

「学生風紀問題」がメディアに多く取り上げられる時期以前は「学生男色」に関する言説が非常に少なく、その実態は不明な点も多い。だが、『当世書生気質』『キタ・セクスアリス』などに見られる当時の男子学生の描写や、1880年代以降活発になる『賤のおだまき』など男色を題材とした文学作品の流行などから、当時の一部の学生(硬派学生)の間に、男色を理想視する価値観が存在していたことは間違いない。こ

うした男色の理想視は、対等な男子学生同士の親密な関係として男色を捉えるという「(二人の関係)としての男色イメージによって支えられていたと考えられる。

3. 「学生風紀問題」の浮上

渋谷知美は『教育時論』誌の分析から、「学生風紀問題」をテーマとした記事が1900年前後に急増することを指摘している。実際、新聞・雑誌などによって、学生の「墮落」が問題として大きく取り上げられるようになったのがこの時期であった。そして「学生風紀問題」記事増加の当初から、墮落学生らによる年少の少年への性的暴行の記事は頻出していた。

この時期の『萬朝報』など新聞各紙の記事を分析すると、墮落学生の男色に関する報道の大きな特徴として、「女色を避け男色を尊ぶ硬派の論理を牽強附会の説として斥け、男色を女色より一層酷い悪習として批判する」「女色と男色とを並列し、両者ともを欲求から来る非道行為として扱う」「学生男色を『二人の男子学生の関係』ではなく『一人の年上側の男子学生が行う(墮落/犯罪)行為』と見なす」という三点が挙げられる。こうした報道の結果、学生男色を「墮落学生(年上側)の欲求による、一方的な非道行為」と捉える見方は、その後広く定着することとなった。このような新たな男色イメージの成立は、二人の対等な男性同士の男色関係を一種の理想とする、硬派学生たちに共有されていた男色イメージに大きな打撃を与えたと考えられよう。

4. 女学生の登場

1899年の高等女学校令公布に伴い、20世紀に入ると高等女学校の学校数・生徒数は急増する。また『魔風恋風』『青春』などの新聞連載小説にも、ヒロインとして女学生が新たに登場するようになる。本田和子が指摘する通り、明治30年代は独特の陰影に隈どられた「女学生なるもの」が誕生した時期であった。

そしてこの女学生の登場は、男子学生の恋愛観にも大きな変更を迫るものとなった。日露戦争終了後の1906年、雑誌『中学世界』誌上において突如、それまで殆んど掲載されなかった

「男女交際」や「恋愛」をテーマにした記事や評論が噴出する。そしてここで語られる、男子学生の「男女交際」及び「恋愛」の相手は、従来のような芸娼妓や女中や料理屋などの女性ではなく、この時期急増し、一躍時代のヒロインとなった女学生であった。

またこうした言説においては、教育を受けた女学生が恋愛対象として登場したことを受け、男子学生と女学生の恋愛は将来の結婚や「家庭」の形成、或いは次世代再生産までも視野に入れたもの(入れるべきもの)として認識されるようになっていた。これは例えば『当世書生氣質』において、「恋愛」と結婚が基本的に別次元のものとされていたことと比較すると、大きな変化であった。

学生の男女交際や恋愛に関しては、『中学世界』一誌をとっても、賛成論・反対論取り混ぜて甲論乙駁の状況となっていた。そうした中で硬派学生たちに強く支持され、後に硬派学生たちの理論的支柱となったのは、大町桂月や長谷川天溪らによって繰り返し説かれた「恋愛排斥論」とも言うべき論調であった。ここでは「男は、力。女は、愛」「日本の武士道にては、恋愛を口にするなどは武士の恥辱なり、人間の恥なり、男の恥なり」などと恋愛そのものが「男らしくないもの」とされ、排斥されるべき対象と見なされたのである。

5. 学生男色の変容

以上見てきたような「学生風紀問題」の浮上や女学生の登場の結果、学生男色のイメージや実態は、どう変化したのだろうか。

まず、「学生風紀問題」報道における男色の扱われ方を受け、男色を「二人の男子学生との関係」ではなく「墮落学生による一方的な非道行為」と見なす認識が強固に成立した。と同時に、恋愛対象としての女学生の登場を受け、男色を「男女間の行為の代替物」として「男女間が隔てられていた時代の蛮行」と見なす認識が新たに付け加えられた。

では「一方的な行為」ではなく「二人の関係」としてイメージされる男色観は存在しなくなったのかということ、そうではない。だが、ここでの男色観もまた、かつて硬派学生が理想とした学生男色イメージからは、大幅に変質していた。この時期に特徴的なのは、学生男色が「男同士の恋」「同性の恋」などとも表現されるようになり、学生男色が硬派学生の占有物ではなくなってきたことであった。例えば俳人の富安風生や作家の里見弴らは、自らを「軟派」「文

学少年」などと規定しながらも、自身が「男同士の恋」を行っていたことを自伝や自伝的小説で描写している。従来の研究では疑われてこなかった「男色＝硬派」という単純な構図は、改められなければならない。

では硬派学生による男同士の親密な関係は、何と表現されたのか。「恋愛排斥論」を繰り返し述べた、硬派学生たちのイデオログ・大町桂月は精神的な深い交流について、異性間よりも同性間の交流を高く評価することで、学生時代の異性との恋愛を排斥しようとする論理を組み立てた。だが同時に、この男性間の関係性は「朋友」「親友」といった言葉で語られ、あくまで恋愛とは別の関係・感情であるとされているのである。こうした「男の友情」賛美論はこの後も多くのメディアを通じて繰り返し語られ、また寮歌などを通じて男子学生たち自身にも共有されるようになっていく。そして「男の友情」賛美論は同時に、硬派たちの男同士の関係を「恋愛」とは別の関係性である、と規定する機能も果たしていったと考えられる。

6. まとめ

硬派学生たちは、男子学生同士の対等な関係としての学生男色イメージを、一種の理想像として共有していた。だが「学生風紀問題」の報道により、学生男色は「関係」としてではなく「一方的な行為」として認識されるようになった。また、恋愛対象としての女学生の登場もあり、「恋愛」が男子学生にとって身近な概念となった結果、男同士の親密な関係は、軟派学生たちを中心とする「男同士の恋」と、硬派学生たちを中心とする「男の友情」の二つの異なるパターンで認識されるようになった。だが、このうち前者は、あくまで異性間の恋愛感情の代替物と位置づけられ、また後者は「恋愛」とは異なるものとして無害化されていった。

<主な参考文献>

- ・古川誠 1994「セクシュアリティの変容：近代日本の同性愛をめぐる3つのコード」『日米女性学ジャーナル』No.17、29-55頁
- ・Pflugfelder, Gregory 1999 “Cartographies of desire: male - male sexuality in Japanese discourse, 1600 - 1950” University of California Press
- ・本田和子 1990『女学生の系譜』青土社
- ・渋谷知美 1999「『学生風紀問題』報道にみる青少年のセクシュアリティの問題化」『教育社会学研究』第65集、25-47頁